

Title	がんの検診に思う
Author(s)	田口, 鐵男
Citation	癌と人. 1998, 25, p. 2-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23832
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

がんの検診に思う

田口 鐵 男*

やはり早期発見が大切

わが国において、がんが死亡原因の第一位になったのは1981年です。それ以後、年々ふえつづけ、いまやがんで亡くなる方は、年間27万人をこえました。亡くなる方の3～4人に1人はがんであるということになります。

がんで亡くなる方がここまでふえてきたいちばんの原因は、高齢化社会になったことだといっているでしょう。

患者さんの数はふえています。一方、この30年ぐらいのあいだに、がんはずいぶんよく治るようになりました。がんの治療率はがんの種類ごとに、また進行の程度によってもちがいますから、当然、早期の患者さんがたくさん来る病院では成績がよくなるし、進行したがんの患者さんが多い病院の成績は悪くなります。したがって、簡単にはいえませんが、現状ではがん全体の半分は治っていると考えられます。

がんの治療率がここまでよくなってきた原因の大きなひとつが早期発見です。それに加えて、手術の方法や術後の管理が前進したこと、そして抗がん剤の進歩とその適切な使い方によって、いままで治らなかつたものも治るようになったということでもあります。

早期発見で見つかるのは、がんもどきであって、検診など意味がないといっている人もおりますが、近年の分子生物学の進歩はがんの発生発育進展など遺伝子レベルで解ってまいります。がんには個性があつて遺伝子の変異はさまざまであつて、その病態の進行もさまざまであることがはっきりしてきました。1コのがん細胞が分裂・成長の過程を考へてみると、がんの

早期発見こそがもっとも大切であることがわかります。早期に発見することが治療にもっともつながるのです。早期の段階で発見できれば、いまは精密検査や診断・治療法がすすんできていますから、治すことができるがんが多くなっています。

がんは症状がでてからではおそく、症状がないうちに発見するには、検診以外に方法がないのです。検診を受ける受けないは本人の自由ですが、これだけがんに関していろいろなことが解ってまいりますと、我々県民1人1人が自覚して検診を受けることが大事ではないでしょうか。

21世紀を目前にして、世界はあらゆる領域で激動の時代をむかえています。たくさんの方の矛盾と困難の問題に直面しています。

旧来の相互依存のモラルのような共同システムが旧世界、旧意識社会のなかに残っています。いまは、自由競争というボーダーレスの世界を構築しようとしている時代に突入しています。

これからは、日本も自由競争システムの上に共同システムを構築してゆかねばならない時代です。自由競争の上での共生の時代でしょう。我々が直面している多くの矛盾と困難を真正面から受けとめて斗ってゆくことが共生への道なのである。

20世紀の壮大な社会主義の実験はほころびはじめています。医療の制度の抜本改革が叫ばれて久しいが旧来の社会意識をもって対処しているかぎり問題解決は先き送りにすぎない。悪平等より自由を優先さすべきであろう。若い世代の無気力を憂うものである。

* (財)大阪癌研究会常任理事 大阪大学名誉教授